

外国語教材における文化的側面の分析手法

城西国際大学 伊藤 隆

1. はじめに

とりわけ過去30年間において、外国語教育における文化教授の重要性は多くの研究者や教師によって主張されてきた。「言語」と「文化」が互いに不可分であるということや、目標言語についてだけではなく目標文化についても学習しなければ、目標文化に属する人々との効果的なコミュニケーションは難しいということなどが、文化教授の重要性を支持する根拠となった。しかし同時に、外国語の授業における文化教授は、無計画に恣意的になされているか、あるいは全くなされていないという問題も指摘されてきた。例えば Byram et al. (1991) は、イギリスの中学校のフランス語クラスの授業分析を行うことにより、このような問題が実際にあることを確認している。

ただし、たとえ教師が目標文化について明示的に教授しないとしても、学習者は教材を通して目標文化に接することになるので、外国語教育における文化教授について考える際には教材の重要性を再認識する必要があるが¹、一方では「高校英語教科書は総じて、もちろん例外はありますが、国際理解の問題について問題意識が弱く、理論的にも、実践的にも研究が遅れているというのが実感です」（三省堂 1993:70）という意見もあり、外国語教材における文化的内容についてのより一層の研究が急務となる。このような研究の目標は、教材において「何をいかに教えるべきか」について議論することになるであろうが、それと並行して、現存の教材において「何が、いかに教えられているか」を明らかにする現状把握の必要もある。「何がいかに教えられているか」を明らかにするには教材分析²が必要となるが、文化的内容の教材分析は容易ではない。その主な困難点として以下の3点が挙げられる。

- ①どの単位をひとまとまりとして分析すべきか（つまり、「教科書全体」か「章」か、それとももっと小さな単位か）
- ②分析の際に何らかのカテゴリーを使うべきか、また使うとしたらどのようなカテゴリーであるべきか
- ③どのような分析手法を用いるべきか

本論は、外国語教材における文化的側面を分析する際の視点を明らかにすることを目的とする基礎的な研究であるが、まず次節において先行研究が上記3つの困難点に対してどのように対応しているのかを概観し、3節においてそれらの困難点への対処の方法を考察する。

2. 先行研究は困難点いかに対応しているか

前述の3つの困難点に対して、先行研究がどのように対応しているのかを概観する。それぞれの研究において、①どのような単位をひとまとまりとして分析がなされているか、②何らかのカテゴリーが使われているか、③どのような分析の手法がとられているか、を以下に整理する。

<p>1. Stevick (1972)</p> <p>①教材全体／章／タスク／行／語</p> <p>②「子ども、同僚、警察官」などの登場人物のカテゴリーと「挨拶、道案内、食べ物」などの話題のカテゴリーにより、格子状の表を作成している。そのほかに「人間関係を保つ、知りたい情報を手に入れる」など言語使用の機会により分類するカテゴリーや、語彙教授がどのようになされているかにより分類するカテゴリーも提案されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>2. Joiner (1974)</p> <p>①教材全体／読解用テキスト／挿絵</p> <p>②1)挿絵 2)文化的題材を含む読解用テキスト 3)教材全体の印象 4)補助教材、の4部門に分かれている。1)はさらに、a)挿絵のタイプ(写真、地図など) b)挿絵に見られる社会の層(経済的レベル、年齢層など) c)全体的印象(現代的、現実的など)に分かれている。2)はさらに、a)テキストのタイプ(対話、説明文など) b)テキストに見られる社会の層(経済的レベル、年齢層など) c)全体的印象(偏っている、興味深いなど)に分かれている。3)では、「この教科書は外国人に対する否定的な見方を助長するか」などの条件が列挙されている。4)には、「教師用指導書は文化教授についての提案を含んでいるか」などの条件がある。</p> <p>③基本的には質的分析であるが、分析者に対する多肢選択式の質問項目が設定されており、量的分析も可能である。</p>
<p>3. Cowles (1976)</p> <p>①教材全体</p> <p>②「基本的に歴史的記述か現代的記述か」「文化的内容が本文・対話・タスクのいずれに見られるか」「ステレオタイプ的な見方を助長するか」などの条件が設定されている。</p> <p>③基本的には質的分析であるが、分析者に対する多肢選択式の質問項目が設定されている。</p>
<p>4. Pfister & Borzilleri (1977)</p> <p>①教材全体</p> <p>②目標文化の表層的な側面について、「より親しみやすいものから親しみにくいものへという順序に配列されているか」「学習者が目標文化と自文化の比較ができるように提示されているか」など12の条件が設定されている。</p> <p>③量的分析と質的分析</p>
<p>5. Levno & Pfister (1980)</p> <p>①教材全体</p> <p>②目標文化の表層的な側面について、「家族や個人について扱われているか」「芸術について扱われているか」「言語は文化的に適切な提示や定義がなされているか」など12の条件が設定されている。</p> <p>③質的分析</p>

<p>6. Macian (1986)</p> <p>①ページ</p> <p>②「創造性」「社会性」「動機づけ」など10項目が設定されている。</p> <p>③量的分析と質的分析の両方が行われている。質的分析に際しては、Frymier (1977) が教師の教材選択の基準となるようにと考案した Annehurst Curriculum Classification System (ACCS) に基づく手法を使用し、訓練を受けた分析者が文化的側面のみならず教材のより全体的な印象について、ライカート・スケール³を用いた分析を行った。</p>
<p>7. Arizpe & Aguirre (1987)</p> <p>①教材全体</p> <p>②メキシコ系・プエルトリコ系・キューバ系アメリカ人について、1)記述は事実であるか2)ステレオタイプの見方はあるか3)過度に単純化されているか4)省略されているか、という4つの条件が設定されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>8. Schulz (1987)</p> <p>①教材全体</p> <p>②「教授目標の記述」や「文化的側面の提示のされ方」など6項目について、「事実であるか」「最新の情報が含まれているか」「具体的に書かれているか」など7つの条件に基づいて分析されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>9. Kramersch (1987)</p> <p>①スポーツについての章に絞り、そのなかで「対話」「読解用テキスト」「挿絵」「設定されている教授目標」などに焦点をあてて分析がなされている。</p> <p>②「マクロ分析」と「ミクロ分析」が行われているが、「マクロ分析」においては「自文化」と「目標文化」というカテゴリーが設定されている。「ミクロ分析」においては、教科書における「話し手」に焦点が当てられ、1)対話における自文化または目標文化に属する登場人物の語り2)文化的情報を伝達するために、記述的あるいは評価的な陳述をする全知の話し手の語り3)目標言語の教授のために文脈のない模範的な陳述をする教育者の語り4)個人的な意見や文化的経験を述べる学習者の語り、の4種類のカテゴリーに分けられている。</p> <p>③「マクロ分析」と「ミクロ分析」という2種類の詳細な質的分析が行われている。</p>
<p>10. Sheldon (1988)</p> <p>①教材全体</p> <p>②「性別・人種・社会階級・国籍についてステレオタイプの・不正確な・見下すような描写はあるか」など文化的偏見についての6つの条件が設定されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>11. Kitao (1988)</p> <p>①教材全体/章/語/挿絵</p> <p>②「文学」「教育」「歴史」など50のカテゴリーが設定されている。</p> <p>③量的分析と質的分析の両方のアプローチを併用することの重要性が主張されている。さらに、分析のためのカテゴリーや基準がいかに設定されたのかを明らかにする必要性も述べられている。</p>
<p>12. Dechert & Kastner (1989)</p> <p>①語</p> <p>②「エチケット」「学生生活」「日常生活における習慣」など99のカテゴリーが、Brooks (1960) と Chastain (1976) をもとに設定されている。</p> <p>③2人の研究者によって量的分析が行われ、両者の判断に食い違いが生じたときには話し合いによって解決された。</p>

<p>13. Ramirez & Hall (1990)</p> <p>①特定の単位はなく、目標文化への言及があると判断された部分は何箇所あるかが数えられ、その結果が章ごとに整理されている。</p> <p>②Pfister & Borzilleri (1977) や Omaggio (1986) などをもとに、「余暇」や「住宅」などの「社会文化的」カテゴリ、「話題」「その話題が話されている状況」「文の機能」を分析した「社会言語学的」カテゴリ、よりマクロ的視点から各章を分析した「カリキュラム・デザイン」カテゴリの3つが設定されている。</p> <p>③量的分析と質的分析</p>
<p>14. Grosse & Uber (1990)</p> <p>①教材全体／ページ</p> <p>②「教材作成者が文化教授を重視しているか」や「ビジネス・言語・文化についてバランスよく扱われているか」などの条件が設定されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>15. Uber & Grosse (1991)</p> <p>①教材全体</p> <p>②「経済的基礎レベル文化」「社会経済的の第2レベル文化」「生活様式的の第3レベル文化」の3つのカテゴリが設定されている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>16. Risager (1991)</p> <p>①教材全体</p> <p>②登場人物や場面などについて考察する「マイクロ・レベル」、扱われている文化的側面について考察する「マクロ・レベル」、自文化と目標文化の比較やステレオタイプなどに注目した「国際的・文化間の問題」、「著者の視点と表現の仕方」の大きく分けて4つのカテゴリが使われている。</p> <p>③質的分析</p>
<p>17. Byram et al. (1991)</p> <p>①教材全体</p> <p>②全体的な分析の後で、「地理的・歴史的情報」や「余暇」など7つのカテゴリを設定している。</p> <p>③第1段階として量的分析を行い、つぎに第2段階として、表現されているイメージが著者の掲げている教授目標と合致しているか、また現実を反映しているかが質的に分析されている。</p>
<p>18. Otto (1992)</p> <p>①教材全体</p> <p>②「黒人やアジア人がどのような状況で描かれているか」「宗教的な少数派や同性愛者などが描かれているか」など4つの条件が設定されている。</p> <p>③質的分析</p>

以上の先行研究における分析方法をまとめると、「①どのような単位をひとまとまりとして分析されているか」については、教材全体・章・読解用テキスト・ページ・タスク・行・語・挿絵・設定されている教授目標・目標文化についての言及があると判断された任意の部分、が単位として用いられているといえる。そして、「②何らかのカテゴリが使われているか」については千差万別であるが、「カテゴリ」が非常に包括的でその数も多い場合と、そうでない場合があるようである。「カテゴリ」というよりもむしろ「条件」の形式をとっている場合もある。また、「③どのような分析の手法がとられているか」については、量的分析と質的分析のいずれか、あるいはその両方が行われている。さらに、「ライカート・スケールを使って結果を数量化しよう

とする」「質的分析を行う際には分析のレベルを複数（例えばマイクロとマクロ）設定する」「量的な分析と質的な分析を併用する」「分析のためのカテゴリーや基準がいかに設定されたのかを明示する」「複数の分析者が分析する」などの工夫もなされている。

3. 困難点にいかに対処すべきか

まずどのような単位をひとまとまりとして分析すべきかについては、前節で概観した先行研究より次のようなことがいえる。

- a. 「教材全体」の印象をおおまかに分析している先行研究が多いが、文化教授がいかになされていないかを探ることがその教材分析の目的であったり、1人の教師が教材選択のための分析をしなければならない場合のように時間的・経済的に余裕がない場合には、「教材全体」を単位にしても構わないであろう。ただし、伊藤（1995）において、教材開発の際にはその教材において採用されるシラバスや教授手法（つまり「何がどのような配列でどのように教えられるべきか」）が先に決定されるべきであると論じたが、「教材全体」を分析の単位とする場合、どのようなシラバスや教授手法が用いられているのかを明らかにするのは容易ではない。ゆえに、シラバスや意図された教授手法を明らかにすることが分析の目的であるならば、「教材全体」を分析の単位とするべきではない。
- b. 「章」を単位とした場合、「教材全体」を単位とするよりは細かい分析ができそうであるが、これは分析の対象となる教材が、場面シラバス、話題シラバス、概念・機能シラバス、内容中心シラバスなどを用いている場合にいえることであろう。その教材が構造シラバスや語彙シラバスなどを用いている場合、各章がどのような文化的内容を含んでいるのかを把握するのは容易ではない。そして、どのような教授手法が使われているのかについても同様にわかりにくい。
- c. 「ページ」「行」「語」などのより細かい単位を用いればより詳細な分析ができると考えるのは、必ずしも正しくない。特定の「ページ」「行」「語」に含まれる文化的内容を分析するのは困難な作業である。そしてこの場合も、反対に分析の単位が小さ過ぎて、用いられているシラバスや教授手法についてはわかりにくい。
- d. 「タスク」を分析の単位とした場合、他の単位を用いたときには全くわからなかった、その教材作成者が文化教授に用いようとしている教授手法について考察することは可能になる。しかし、「タスク」のみを分析して他の側面を分析しないとするならば、その教材の全体像やシラバスについて考察することはできない。
- e. 「挿絵」のみを分析の対象とした場合にも、その教材全体やシラバスについて考察することはできない。

以上5つの点をふまえると、教材分析の目的と用いるべき分析の単位の対応関係は、以下のようになる。

- 1) 教材に用いられているシラバス（教授内容とその配列）に関心がある場合、場面／話題／概念・機能／内容中心シラバスなどが使用されているときには、「章」を単位とする分析が可能であろう。
- 2) 教材に用いられている教授手法に関心がある場合、「タスク」を単位とする分析が必要である。

- 3) 教材の教授目標（その教材は何の教授を目指しているか、また学習者の側からみれば、その教材を使用することによって何の学習が期待されているのか）に関心がある場合、上述の1)と2)両方の分析が必要であり、その分析結果と Kramsch (1987) が行っているような「設定されている教授目標」との比較も意味があるであろう。

つぎに2番目の困難点として、何らかの 카테고리を使うべきか、また使うとしたらどのようなカテゴリであるべきかについてであるが、分析者があるべき文化教授のイメージを非常に明確にもっていたり、特に分析したい文化教授の側面がある場合、「カテゴリ」ではなく「条件」の形式をとることも可能である。また「カテゴリ」の形式をとったとしても、分析の目的と関係のない側面についてのカテゴリは不要なので、カテゴリの総体が目標文化の教授の全体像をとらえていなくても構わない。一方、分析者が対象となる教材に含まれる文化教授をより網羅的に多角的にとらえたいと考えている場合、必然的に用いられるカテゴリのタイプも数も増える。分析者の関心がシラバス（教授内容の選択と配列）と教授手法の両方にあるならば、カテゴリも両者を分析できるような包括的なものでなければならない⁴。

最後に3番目の困難点として、どのような分析の手法をとるべきかについては、つぎのようなことがいえる。分析結果に客観性をもたせなければ、量的分析を行ったり分析者の数を増やすべきである。そして、分析結果の数量化には、分析の単位の数を数えること以外にライカート・スケールを使うことも可能である。ただし、柳瀬 (1996:27) が指摘するように、「統計学・推計学は数量化以後の手続きの客観性を保証しているだけ」であり、教材分析は分析者の価値判断を常にとまなう作業であるということに留意しなければならない。このことは教材の分析に際して、量的分析と質的分析のいずれかが絶対的に優れているわけではなく、分析の目的に応じて両者を組み合わせる必要があるということを示唆している。またいかなる分析手法を用いるにせよ、用いたカテゴリや基準がどのような過程を経て設定されたのかを、明示する責任が分析者にはある。

4. おわりに

あるべき文化教授のイメージは十人十色であり、分析者は文化教授にとまなうさまざまな選択肢と教授対象となる学習者のニーズや現状などを把握して、自らの行う文化教授の教授目標・教授内容・内容配列・教授手法をまず決定したうえで、教材分析に臨むべきである。その結果、分析の単位・カテゴリ・手法は、自分のイメージする文化教授にふさわしい教材の分析を可能にするものでなければ最低限ならないはずである。さらに時間的・経済的に許されるならば、自らが目指してはいないタイプの文化教授に関わる側面の分析をも可能にするような、さらに包括的な単位・カテゴリ・手法を用いることが望ましい。そうすることにより、分析者はその教材が自分の実現しようとする文化教授の助けとなるものであるかどうかを、より多角的な文化教授の枠組みと照らし合わせて比較することができるようになる。そのような比較によって、教材分析はより大きな教育的な意味をもつのである。

註)

1. 外国語教育において文化教授を行う際の教材の重要性については、伊藤 (1995) でも論じている。
2. 外国語教材における文化的内容の分析は「内容分析 (content analysis)」と呼ばれることもある。内容分析について Byram et al. (1991:303) は、「通常、分析されるべき項目の標本が取り出され、分析のカテゴリも設定される。そして、これらのカテゴリが何を意味しているかが特定され、これら

は記述されたりその性質が明らかにされる。分析の手法は分析の目的に大きく左右され、特定の語を数えることもあれば、大まかに読んだ後であまり厳密でない記述をすることもある」と説明している。また Asher (1994:725) は、60年代における内容分析は主に語や概念の頻出度に焦点をあてていたが、最近ではより質的な分析が多くなっていると論じている。

3. 「ライカート・スケール」とは、Richards et al. (1992:25) によると、何かに対する人間の反応を測定するための技法である。この技法では、被調査者は何らかの意見や態度について書かれた文を提示され、それらについてどれだけ同意するか、またはしないかを5段階や7段階の尺度から選択することを求められる。
4. 具体的な教授内容の選択については Ito (1994a)、配列については Ito (1994b)、教授手法については伊藤 (1993) を参照していただきたい。

引用文献

- Arizpe, V., & Aguirre, B. E. (1987). Mexican, Puerto Rican, and Cuban ethnic groups in first-year college-level Spanish textbooks. *The Modern Language Journal*, 71 (2), 125-137.
- Asher, R. E. (Ed.). (1994). *The encyclopedia of language and linguistics* (Vol. 2). Oxford: Pergamon Press.
- Brooks, N. (1960). *Language and language learning: Theory and practice*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Byram, M., Esarte-Sarries, V., & Taylor, S. (1991). *Cultural studies and language learning: A research report*. Clevedon, England: Multilingual Matters.
- Chastain, K. (1976). *Developing second language skills: Theory to practice*. (2nd ed.). Chicago: Rand McNally College Publishing.
- Cowles, H.M. (1976). Textual materials evaluation: A comprehensive checklist. *Foreign Language Annals*, 9 (4), 300-303.
- Deçhert, C., & Kastner, P. (1989). Undergraduate student interests and the cultural content of textbooks for German. *The Modern Language Journal*, 73 (2), 178-191.
- Frymier, J. (1977). *Annehurst curriculum classification system: A practical way to individualize instruction*. West Lafayette, Indiana: Kappa Delta Pi.
- Grosse, C. U., & Uber, D. M. (1990). The cultural content of business French texts. Paper presented at the Eastern Michigan University Conference on Languages and Communications for World Business and the Professions. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 334 852)
- Ito, R. (1994a). A study on the development of the Japanese EFL learner's intercultural competence: With reference to the aims of intercultural education within foreign language education. *CASELE Research Bulletin*, 24, 225-231.
- Ito, R. (1994b). A study on the development of the Japanese EFL learner's intercultural competence: With reference to syllabus design. *CASELE Research Bulletin*, 24, 169-174.
- Joiner, E. G. (1974). Evaluating the cultural content of foreign-language texts. *The Modern Language Journal*, 58 (5-6), 242-244.
- Kitao, K. (1988). The teaching of American culture in secondary English courses in Japan: An analysis of textbooks. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 303 993)
- Kramsch, C. J. (1987). Foreign language textbooks' construction of foreign reality. *The Canadian Modern Language Review*, 44 (1), 95-119.
- Levno, A. W., & Pfister, G. G. (1980). An analysis of surface culture and its manner of presentation

- in first-year college French textbooks from 1972 to 1978. *Foreign Language Annals*, 13 (1), 47-52.
- Macian, J. L. (1986). An analysis of state adopted foreign language textbooks used in first- and third-year high school Spanish classes. *Foreign Language Annals*, 19 (2), 103-113.
- Omaggio, A. C. (1986). *Teaching language in context*. Boston: Heinle.
- Otto, K. F., Jr. (1992). Minorities and materials. *Die Unterrichtspraxis*, 25 (2), 153-157.
- Pfister, G. G., & Borzilleri, P. (1977). Surface culture concepts: A tentative design for the evaluation of cultural materials in textbooks. *Die Unterrichtspraxis*, 10 (2), 102-108.
- Ramirez, A. G., & Hall, J. K. (1990). Language and culture in secondary level Spanish textbooks. *The Modern Language Journal*, 74 (1), 48-65.
- Richards, J. C., Platt, J., & Platt, H. (1992). *Dictionary of language teaching & applied linguistics*. (2nd ed.). Harlow, England: Longman.
- Risager, K. (1991). Cultural references in European textbooks: An evaluation of recent tendencies. In D. Buttjes & M. Byram (Eds.), *Mediating languages and cultures: Towards an intercultural theory of foreign language education* (pp. 181-192). Cleveland, England: Multilingual Matters.
- Schulz, R. (1987). The FRG and the U.S. as portrayed in foreign language textbooks: A comparative study. *Die Unterrichtspraxis*, 20 (1), 95-101.
- Stevick, E.W. (1972). Evaluating and adapting language materials. In H.B. Allen & R.N. Campbell (Eds.), *Teaching English as a second language: A book of readings*. (2nd ed.) (pp. 101-120). New York: McGraw-Hill.
- Sheldon, L.E. (1988). Evaluating ELT textbooks and materials. *ELT Journal*, 42 (4), 237-246.
- Uber, D. M., & Grosse, C. U. (1991). The cultural content of business French texts. *The French Review*, 65 (2), 247-254.
- 深沢清治・高塚成信・川尻武信・杉野直樹・川島浩勝. (1992). 「異文化理解・異文化コミュニケーションを
目指した英語教育」『英語教育』41/ 7/ 9月増刊号, 63-83.
- 伊藤隆. (1993). 「日本人英語学習者の異文化間能力育成についての一考察 方法論に関する研究をもとに」
『教育学研究紀要』(中国四国教育学会) 39/ 2, 115-120.
- 伊藤隆. (1995). 「文化教授を目指した外国語教材を開発するための理論的枠組み」松村幹男先生御退官記念
事業会編. (1995). 『松村幹男先生退官記念英語教育学研究』(pp. 176-185). 広島: 溪水社.
- 三省堂. (1993). 「高校英語教科書への期待像」『英語教育』41/ 13/ 2月増刊号, 69-70.
- 柳瀬陽介. (1996). 「授業研究と英語教育学」『現代英語教育』33/ 1/ 4月号, 26-29.